2013～2014年度　国際ロータリーのテーマ
ロン D. バートン

ロータリーを
実践し

みんなに
豊かな人生を

RI第2510地区 留萌ロータリークラブ

会報

2013►2014
WEEKLY REPORT

留萌ロータリークラブ
会長目標　集中と調和

会長／中出敏彦　幹事／大嶋孝広

プログラム

●本日
来賓卓話「留萌・深川間高規格道路について」
留萌開発建設部 次長　関　新次 様

結婚記念日
5月21日　辻本　哲也

●次週予定
移動例会「ＩＭ」（羽幌町）

No. 2606
第43回　5月21日

出席報告

前例会

会員総数	41名
出免会員	8名
出免出席	6名
基準会員出席	21名
出席率	77.14%

前々会　第40回　4月23日

欠席会員	12名
内メイクアップ	6名
修正出席率	88.88%

例会／毎週水曜　12:15～13:15　留萌産業会館2F

会長報告

1．国際ロータリー第2510地区2014～2015年度の国際奉仕地区委員の委嘱状が届きました。西谷英樹会員です。よろしくお願いします。

幹事報告

・米山学友、学友委員会合同の家族懇談会開催の案内が届きました。皆様に回覧いたします。

３分間情報

会員研修委員会　阿部委員長

ロータリークラブの初代会長はポール・ハリスではない、というお話をしようと思います。国際ロータリーではなくロータリークラブの初代会長のことです。ある会員から質問をいただき、興味があったので創立から会長決定の経緯を調べてみました。

1905年２月23日の夜、ポール・ハリスは友人で石炭業者のシルベスター・シールとレストランで食事をしました。この場でハリスが温めてきた、ロータリークラブにつながる原案が披露され、さらに、予め考えを打ち明けていたガスターバス・ローアと彼の友人ハイラム・ショーレーの２人が待つ、ユニティビルの711号室へ２人で向かいます。この711号室がロータリー発祥の場所となっております。

２回目の会合は２週間後の３月９日ハリスの事務所で行われました。７名になった会合では、会員は経営者、共同経営者、会社役員でなければいけないこと、ハリス発案で会員の事務所をかわるがわる会場にすること等が話されました。

第42回　５月14日（水）　天候／晴

1905年３月23日にシルベスター・シールの事務所で開かれた第３回目の会合では、クラブ名が検討されました。候補はたくさん提案されましたが、あれもダメこれもダメとなかなか決まらず、論争に疲れ果てた彼らは、誰言うとなくロータリー・クラブで、ということになり、名付けたのは誰か明確になっていないそうです。但し、議論の中「ロータリー」の言葉を最初に発案したのは自分であるとハリスの著書には書かれております。

この第３回の会合では、もう一つ大事な議題がありました。そろそろ会長をきめる時期であることをハリスが伝えた時、これまでの経緯から、そこにいる全員が頭に描いたのは、ポール・ハリスでした。しかし、当のハリスは「自分は組織を作り上げる人であり、新会員の勧誘やクラブの性格作りなどのため、舞台裏で働く方に回りたい。」と言って譲らず、代わりにシルベスター・シールの名前を会長にあげました。こうしてシカゴ・クラブの最初の２年間、ハリスはどんな役職にも就きませんでした。ただし役員を指名したのは彼であり、クラブの運営に関しては、彼の判断に従ったとされています。

ミニ情報があります。先週花見例会で観ることが出来なかった、ロータリークラブが植樹した桜を探しに、昨日夕方行ってまいりましたので報告いたします。例会で写真を撮った所の裏側に入口があるのでそちらから入場しました。初めて見るという方は、入口の看板でしっかり番号と場所を確認することをお勧めいたします。理由は他の木にはほとんど巻き付いている名前入りの金属のプレートがこの木には付いていません。そして、おそらく「留萌ロータリークラブ」と書いてあったはずの木札は「留萌」までしか読めず、ここに「ロ」と書いてあったはずだというところをよく目を凝らして見て、ようやく「ロ」が認識できるレベルとなっているからです。

現状花は半分くらい咲いています。坂の一番下まで降りなきゃ見れないので、ちょっとした運動になります。この季節、団子片手に軽くウォーキングしてみてはいかがでしょうか。

ニコニコBOX

- 先週の例会を欠席しました。　中出会長
- 高田会員いつもお世話になっています。　大嶋幹事
- 我が生い立ちパート２をさせて戴きます。　高田会員

前　回	699,600円
今　回	6,000円
累　計	705,600円

プログラム

「我が生い立ち　パートⅡ」

高田　　潔会員

まずは、例会運営委員会にこの様な機会をいただき、感謝申し上げます。我が生い立ちパートⅡと言う事ですから、自分の人生を語っていくしかないのですが、自慢話に聞こえた場合はご勘弁下さい。私自身、クラス会に出席してもあまり思い出話を積極的に話したくない方ですし、過去の事より今の自分の置かれた状況と、将来どうやって生きていくのかという方が大切だと思っておりますので、思い出話をあまり話したことはありません。しかし本日は過去の話をせよとの事ですから、お礼を申し上げてお話をさせていただきます。

話の概要と致しましては、小平町達布の少年期と旭川の土建会社に勤めていた頃と、大阪での学生生活の青年期、そしてその後という事で小平町の役場勤務と現在の設計事務所経営の話とさせていただきます。

まずは、少年期の達布での生活ですが、今から66年前に達布の滝下、今の小平ダム（オビラシベ湖）付近で誕生しました。小学校入学頃には達布の市街地付近に引越し、達布小中学校に通学しました。ちなみに私が住んだのが達布５線で、市街地が達布４線でした。当時、達布の産業としては炭鉱が盛んな時期で、１学年３クラスあり、九州からの転校生もありました。中学生の時には九州から転勤してきた数学の先生

が大変綺麗だったため、私は好んで数学を勉強しました。それが今も役に立っています。

当時、達布の市街地は大変活気があり、一般の商店の他に食堂や旅館もあり、達布市街と炭鉱住宅街の公民館では頻繁に映画の上映や、旅芝居が上演されており、栄えていた達布の記憶が今でも思い出されます。私の父はその達布で大工を営んでおりましたので、私も大工になろうと思っておりました。

中学校卒業後、私は留萌工業高校に入学しましたが、実は当時、留萌高校の工業課程として土木科と電気科が開設され、翌年に建築科が開設されました。ですから、入学時は留萌高校工業課程でしたが、卒業時に初めて留萌工業高校という名前がつきました。その留萌工業高校では土木科に入学し、天塩炭鉱鉄道にて通学しました。この天塩炭鉱鉄道は石炭を運ぶ貨車と私たちを運ぶ客車を一緒に牽引しておりましたので、留萌まではけっこう上り坂がありまして、蒸気機関車がその坂を登れなくなりますと、前の駅まで戻って貨車を一両はずして又登るという事をしていた様に記憶しております。

その様な記憶の中、留萌工業高校土木科を卒業し、土木科でしたので、旭川の荒井建設という土建会社に入社致しました。この会社はトンネル工事などを手がける大きな会社で、ここに入社し土木工事現場を転々といたしました。最初の工事現場は陸の孤島と呼ばれていた雄冬で、当時道路は無く、増毛港から定期船が出ておりそれに乗って行った記憶がございます。そこで隋道（トンネル）の工事現場で、クリスマスの時まで補助監督員として勤めておりました。クリスマスの頃になりますと定期船も欠航となり、別苅まで夜具も持たないで漁船に乗せて貰って帰って参りました。その他では名寄の手前の士別市付近の道々の改良工事現場で、道路の拡幅と路盤を改良するという現場でした。車を通しながらの工事でしたので、埃まみれで測量した記憶がございます。また、岩内の雷電海岸を通って瀬棚方向へ向かう途中の島牧村の林道工事にも行きました。ここは道路を作る工事でしたので山を切り崩す作業があり、もちろん電気

は来ておらず、発電機を持ち込んでの生活でした。いわゆる飯場の生活で、工事の人達と一緒の生活でした。ただ、ご飯はたくさん炊くせいか大変美味しかった記憶がございます。雄冬でもダイナマイトは使いましたが、ここでは山を切り崩すための発破で危機一髪の命拾いをした事も思い出として残っております。普通ですと発破の前後には旗振りの人が居て指示をするのですが、偶々私が発破の場所を歩いていた時、轟音と共に目の前で土砂が舞い上がるのを見ました。本当に幸運だったのか、その土砂に当たる事無く無事難を逃れました。

それと北島三郎の実家近くの知内で圃場整備事業があり、これは小さい田んぼを一つにして農業経営をしやすくするという工事でした。ここでは、木古内が近かったのでそこの飲み屋に連れて行ってもらった楽しい思い出もございます。ここの会社はトンネル工事が得意だったものですから、たしか上富良野だったと思いますが、人間の背丈ほどの隋道を山の反対側から掘ってこちらまで貫通させて水を通す、水路隋道の現場へも行きました。この様に土木工事現場の監督員として夜具だけを持参して、転々と飯場生活をしてきましたが、この様な生活に見切りをつける事にしました。これは入社する時に部長さんから言われた言葉ですが、３年間は頑張ってくれと、そうすればこの仕事が良いか悪いかが判ると言われ、３年経ったからです。この仕事では家庭を持っても家族と生活は出来ない事と、私たちと一緒に入った人の中で大学卒の人がおりまして、何故かその人だけ待遇が良いと言う事が目につきましたので、私も大学へ行こうと思いつき、この２点の理由で退職を

第42回　５月14日（水）　天候／晴

する事にいたしました。

これが私の大きな転換期となりまして、土建会社からは再三、就職してから大学進学は無理と言われ、これがかえって私を奮起させ、闘志を燃やさせることとなりました。大学へ行くにもお金がありませんので、働きながら通える大学二部へ進もうと思いました。留萌工業高校では、父の関係する建築科は無かったものですから、大学で建築学を学びたいと思いましたが、工業高校の数学には微分積分がなく、英語も不十分だったことから、札幌の予備校で１年間受験勉強をすることを考え、アルバイトをしながら予備校に通いました。アルバイトは札幌の毎日新聞社から各新聞販売店に新聞を届ける仕事で、朝が早く眠いのがつらい問題でした。半年が経って、このままではいけないと気が付き、何せ、予備校の授業内容はレベルが高く、現役の高校生がよりレベルアップを図っての授業ですので難しすぎる事と、アルバイトを終えての勉強で疲れて眠気がくる事から、勉強方法を修正し、残り半年は大和田の実家に戻り部屋にこもって勉強をしました。受験は夜間の工学部を選択し、受験日の早い大阪工業大学と東京方面の３つの大学を受験する事にしました。そして大阪工業大学に合格し、入学することにしました。理由は関西方面ではあるが、歴史的にも教育内容も気に入ったからでございます。

ということで大阪へ転居しましたが、身寄りのいない大阪へは、大学から紹介された下宿を頼りに、列車を乗り継いで行きました。大学の近くの旭区と言う所にある三畳間の下宿屋でございました。働きながら４年間で大学を卒業すると決めておりましたので、本来であれば何処かに就職をして大学へ通えば良いのですが、勉強時間に支障があってはならないので、アルバイトを探しました。４年間で卒業する為には短い時間のアルバイトで生計をたて、講義を受ける前には１時間くらい睡眠をとってから大学へ行く、というスケジュールを実行しました。アルバイト先は色々ありましたが、特殊印刷会社ではプラスチックや厚い紙に熱で金箔を押し付けて印刷する会社でのアルバイト、そして皆さんには信じられないかもしれませんが、ホテルのレストランでウェイターもやっております。淀川の畔の造幣局の近くにあるリバーサイドホテルというかっこ良い名前のホテルで、山本リンダのディナーショウも開かれておりました。中でも単価が良かったのは、難波のモータープールでのアルバイトで、ここは高速道路の降口で近くに高島屋デパート、プロ野球や場外馬券を販売する通称難波球場、大相撲が開催される府立体育館などがあり、大勢の人が集まる場所でしたので売り上げが多額でした。ただ、多数のアルバイトがあり、駐車スペースには預かった車を隙間無く詰め込む技術が必要でした。多少サイドミラーを擦っても目をつぶっておりました。

大学の講義は、一部は４時限ですが二部は３時限しかありませんので、所定の単位を取得するのに苦労いたします。４年で大学を卒業するためには単位を落とす事ができません。事実、私も地学の単位を落としましたが、化学実験の講義を受けて、これは女性の先生でしたが何とか単位をもらい卒業する事ができました。４年間、アルバイトと勉強に明け暮れましたが意外と時間があるもので、将来のために資格を取ろうとの事で、２級建築士、宅地建物取引主任者、測量士補、そして大阪でアルバイトしながらでも出来るかと思いまして普通自動車の２種免許も取得しました。

大阪の４年間の生活で得た最大の財産と言えば、「儲かりまっか？ぼちぼちでんな！」これがなにわ商人の商魂ぶりで、昼のアルバイト先で目の当りにした、言葉はやわらかいが、内心は競争心どころではなく、儲けてやるという闘争心に燃えている商人を見せていただきました。私はこの事を自分の将来に必ず役立てたいと肝に命じました。三畳一間の二食付きで生活した大阪が私の第二の故郷となった瞬間でした。

（次週につづく）